氏　　名	増田　斎
学位（専攻分野）	博士（学術）
学 位 記 番 号	総研大甲第 2440 号
学位授与の日付	2023 年 9 月 28 日
学位授与の要件	文化科学研究科　国際日本研究専攻 学位規則第6条第1項該当
学 位 論 文 題 目	遠藤周作と戦後経験――〈踏絵〉と〈転向〉をめぐる戦中派キリスト教作家の文学実践
論 文 審 査 委 員	主　査　　伊東　貴之 国際日本研究コース　教授 クレインス　フレデリック 国際日本研究コース　教授 戦　暁梅 国際日本研究コース　教授 坪井　秀人 早稲田大学　文学学術院　教授 赤江　達也 関西学院大学　社会学部　教授

博士論文の要旨

氏　　名：増田　斎

論文題目：遠藤周作と戦後経験――〈踏絵〉と〈転向〉をめぐる戦中派キリスト教作家の文学実践

本論文では、カトリック信仰を持つ作家・遠藤周作（1923～1996年）の「戦後経験」に着目し、遠藤が文学実践を通して描き出そうとした〈踏絵〉と〈転向〉が交差する場を、解明するものである。

「はじめに」では、本論文の目的として、次の3つを挙げた。

1. 遠藤周作が戦中派キリスト教作家として自己形成する道程を明らかにする。
2. 遠藤周作の戦後キリスト教作家としての政治的実践を明らかにする。
3. 遠藤周作は戦後の文学実践のなかで戦時に直面した倫理的課題に取り組み、同時に戦後の同時代的課題に応答をしていたことを明らかにする。

これら3つの問いは、それぞれ**「第I部　キリスト教作家の遠藤周作」**、**「第II部　遠藤周作と大阪万博――1970」**、**「第III部　遠藤周作の小説と戦後経験――1960／1970」**に対応する。作家研究と作品研究を往還して遠藤が思考する戦時の倫理的課題を捉え、更には刊行当時の社会的・政治的状況を整理して、戦後の同時代的課題にどのように応答をしたのか、その方法論を検討する。

序章「戦後経験という視座――〈踏絵〉と〈転向〉が交差する場所」では、キリスト教文学及び遠藤周作研究史を概観し、歴史的文脈を踏まえた解釈の提示が共通課題であることを示した。本論文では、遠藤周作文学を「キリスト教文学」であり「戦争文学」であると解する視点を提示するために、遠藤の「戦争体験」と「戦後経験」を検討し、戦中派キリスト教作家の文学実践を検討する意義を示した。

第I部第1章「〈キリスト教作家〉としての自己形成――読者から批評家、そして小説家へ」では、遠藤周作がキリスト教作家となる過程を辿るために、信仰経験やキリスト教文学への姿勢を検討した。遠藤は、西欧のキリスト教を「合わない洋服」と表現するように、主体的な受洗ではなかったからこそ、キリスト教作家としての問題意識を培っていく。遠藤は、創作活動を通して、人間や社会を超越した形而上学的な「人間を超えた世界」を「創る」ことを使命とした。

第2章「遠藤周作と宣教師たちの交友――戦時下弾圧、GHQ占領期、第二バチカン公会議を背景に」では、遠藤周作がキリスト教作家として行った創作活動、文化活動に深く影響を与えた外国人宣教師として、アルフレッド・メルシエ、ペテル・J・ヘルツォーク、ジェームス・F・ハヤットを取り上げた。戦時下日本で外国人宣教師がスパイ容疑をかけられ弾圧・拷問を受けた事例や、GHQ占領期に発行されたカトリック布教雑誌『カトリック・ダイジェスト』に遠藤が関与していたこと、そして第二バチカン公会議を背景にメディアを用い

た宣教活動に、キリスト教作家として協力したことを示した。

第 II 部第 3 章「キリスト教作家による宗教芸術の体現——大阪万博キリスト教館の形成過程」では、1970 年大阪万博に、大衆伝道とエキュメニカル運動の具現化のために「キリスト教館」が出展され、遠藤周作が関与していた事実を明らかにした。遠藤を中心としたプロデューサーたちは、広告代理店の助言を受けながら、キリスト教信仰を持たない者の記憶にも刻まれるような演出を画策し、「宗教芸術館」を形成した。また、カトリックとプロテスタントが共同で宗教行事を実施するなど、教派の垣根を越えて、大阪万博のなかで「調和」の精神を体現した。

第 4 章「戦後キリスト者の主体性論争——大阪万博キリスト教館界における対立」では、大阪万博キリスト教館出展を巡る反対運動を対象とし、キリスト教館という小さなパビリオンが、戦後日本社会を象徴する〈政治の季節〉を体現した場になっていたことを明らかにした。キリスト教館のプロデューサーである遠藤周作は、政治的なものを排除するような「芸術」を体現したと批判され、キリスト教作家としての政治的立場が問われた。本運動の分析を通して、戦後のキリスト教界に「主体性論争」が巻き起こっていた実相を示した。

第 III 部第 5 章「〈踏絵〉と〈転向〉の交差——遠藤周作『沈黙』の道程」では、遠藤周作がキリシタン時代の「踏絵」を描く背景には、戦時下キリスト教徒として過ごした裏切りの経験や、またその経験を背負って戦後を生きる「転向」の問題があったこと示した。最初のキリシタン小説「最後の殉教者」(1959 年)、再転向とユダの許しが主題となった「その前日」(1963 年)、戦時下に受けた不条理な暴力の記憶を描いた「札の辻」(1963 年)、棄教／転向の経験を消費する世代を風刺的に捉えた「帰郷」(1964 年) の分析を通じ、『沈黙』(1966 年) を「キリスト教文学」と「転向文学」を架橋する作品と位置付けた。『沈黙』が多様な読者に支えられていたのは、遠藤周作が戦中派キリスト教作家として、戦時の倫理的課題と対峙し、過去—現在—未来を複合的に捉える歴史意識を体現する「戦後経験」を持っていたことを示した。

第 6 章「〈裏切った弟子〉としての私——遠藤周作『死海のほとり』における巡礼」では、『死海のほとり』(1973 年) は、遠藤周作自身を彷彿とさせる小説家「私」が、現代イエスラエルにてイエスの足跡を辿るなかで、戦時下の記憶を取り戻していく物語として読解した。「私」は、戦時下の経験によって教会から離れながらも、「裏切った弟子」に自己を投影しながら戦後社会を生きてきた。だが、戦時下に体験した裏切りの行為が、戦後を生きるなかでもいつまでも傷として残り、その克服のために〈教会のイエス〉ではなく〈私のイエス〉を探求する行為が必要であったと解釈し、それは遠藤自身にも共通する課題だったことを明らかにした。

第 7 章「〈無力なイエス〉が成し得たもの——遠藤周作『イエスの生涯』と同伴者」では、遠藤周作が評伝という形式を通して、どこに強調点をおいて聖書を読み、イエスを描こうとしたのか、聖書に対する基本的な理解を示した。遠藤は、イエスを見棄て、裏切った弟子たちが、再び信仰を取り戻し、使徒へと変貌した理由に関心を寄せた。それは遠藤が「踏絵」を踏むような戦争体験を経て、それでもなおイエスに従う「弟子」として歩み続けた作家であったからだ。イエスは、自身を裏切った者たちのために十字架で死に、愛と救いを祈り、そして復活し、共に歩み続ける「同伴者」であり、そこに「踏絵」と「転向」の相違点を見出した。

第 8 章「〈無力なイエス〉と戦後経験——遠藤周作のイエス像批判をめぐって」では、遠藤周作が描く無力なイエス像を、戦後キリスト教界の文脈で捉え直し、その意義について検討した。遠藤周作のイエス像への批判は、（1）転向する弱者をイエスが批判しないこと（2）イエスが無力であることに対して向けられたが、その背景には、聖書学の影響や、戦後日本社会のなかでキリスト教徒が模範とすべきイエス像の論争があった。信仰的にも政治的にも立場が求められる時代のなかで、無力なイエス像を描くことは、戦中派の遠藤にとって「異議申し立て」であったことを示した。

終章「遠藤周作の宗教的経験としての戦後経験」では、戦中派キリスト教作家である遠藤周作の文学実践は何だったのかを改めて検討し、残された課題を挙げた。遠藤周作及び遠藤が描くイエスは、内面の問題に終始し、社会や政治、歴史を変革する思考がないと批判されてきた点を取り上げ、宗教的経験としての戦後経験を語る意義を示し、応答した。遠藤周作の文学実践は、暴力を前にした人間の「弱さ」の検討を通して、過去を振り返り、現在を捉え、未来を思考するような、複合的な歴史意識を喚起させ、戦争を捉え直す力を促すものと結論づけた。

（別紙１ Separate Sheet 1）

Results of the doctoral thesis defense

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名　増田　斎

Title
論文題目　遠藤周作と戦後経験――〈踏絵〉と〈転向〉をめぐる戦中派キリスト教作家の文学実践

本論文は、戦後の日本において、カトリック作家として活動し、世界的にも著名な遠藤周作を俎上に載せて、先行研究の問題点も踏まえながら、特にその戦争体験・戦後経験と文学作品や執筆活動との関わり、キリスト者としての文化活動などに焦点を当てて論じたものである。具体的には、代表作『沈黙』において、いわゆる「踏絵」や「転向」の問題が描かれた背景には、戦時下のキリスト者への弾圧と抑圧、それを承けての国家への屈服や服従、更に対外的に侵略戦争での加害に転じるなどの重い経験が表象されるとともに、遠藤自身の実存的な問いが同作に横たわっていることを指摘して、それが後年の『死海のほとり』『イエスの生涯』などにおける「裏切った弟子」「無力なイエス」の造型などにも反映した点を極めて説得的に明らかにしている。また、大阪万博キリスト教館の形成過程や遠藤らキリスト教信仰を持つ芸術家の関与について、戦後キリスト教会の思潮や動向、エキュメニカル運動や大衆伝道との関わりを踏まえて論じた点には、遠藤自身の戦争体験などを踏まえた政治的・社会的実践として、これまで余り知られていなかったり、未発掘のエピソードや経緯の紹介なども多く、資料的にも、特筆に値する。

本論文は、全体で三部構成となっており、序章と終章のほか、全八章からなっている。

まず、序章「戦後経験という視座――〈踏絵〉と〈転向〉が交差する場所」では、研究史を概観しながら、遠藤周作を「キリスト教文学」であると同時に「戦争文学」であるとする視点を提示し、キリスト教界内部での戦争責任論などにも言及しつつ、彼の「戦争体験」と「戦後経験」を明らかにする意義を示した。次いで、第Ｉ部「キリスト教作家の遠藤周作」は、第一章「〈キリスト教作家〉としての自己形成――読者から批評家、そして小説家へ」及び、第二章「遠藤周作と宣教師たちとの交友――戦時下弾圧、ＧＨＱ占領期、第二バチカン公会議を背景に」からなる。第一章では、少年期の受動的な洗礼であったことから、西欧のキリスト教を自身に「合わない洋服」に喩えて、それを日本人の身体にあった和服のように着こなそうと試みた遠藤周作の自己形成を辿る。第二章では、青年期の遠藤に強く深い影響を与えた宣教師として、アルフレッド・メルシエ、ペテル・Ｊ・ヘルツォーク、ジェームス・Ｆ・ハヤットを取り上げて、戦時下日本での外国人宣教師に対する、スパイ容疑での弾圧や拷問、それを前にして、為す術も無かった自身への悔恨や倫理的な問い掛け、それらが『黄色い人』『影法師』などの後年の作品にも活かされている点、また、ＧＨＱ占領期に発行された『カトリック・ダイジェスト』誌に遠藤が関与していたこと、第二バチカン公会議を背景として、カトリック作家として、メデイア戦略にも、積極的に関わったことなどを具体的に論証している。

第Ⅱ部「遠藤周作と大阪万博――１９７０」は、第三章「キリスト教作家による宗教芸

術の体現――大阪万博キリスト教館の形成過程」と第四章「戦後キリスト者の主体性論争――大阪万博キリスト教館における対立」からなる。前者では、大衆伝道とエキュメニカル運動のために、日本国内のカトリックとプロテスタント、バチカン市国による宗派を越えた協力・協働の下に、一九七〇年の大阪万博に「キリスト教館」が出展されて、そこに遠藤をはじめとするキリスト教信仰を持つ芸術家たちが関与し、協力したという、これまで周知されていなかった経緯を具体的に明らかにしており、資料的な価値も高い。次いで、後者では、「政治の季節」でもあった当時において、万博という国家的な事業に協力することの是非について、また、むしろ「政治的」なるものを排除して、「芸術性」を体現しようとした遠藤らの姿勢が、特に左派的なキリスト教徒から批判されたこと、そこには、戦後キリスト教界のいわば「主体性論争」が反映されていた点を明らかにするとともに、前述したような戦争体験を踏まえた、遠藤なりの政治的実践や真摯な応答として、一定の評価を試みようとしている。

第Ⅲ部「遠藤周作の小説と戦後経験――１９６０／１９７０」は、全四章からなる。まず、第五章「〈踏絵〉と〈転向〉の交差――遠藤周作『沈黙』の道程」では、通常、江戸・徳川時代のキリスト教禁令を背景とした歴史小説として捉えられがちな代表作『沈黙』について、戦時下を生きたキリスト教徒としての不条理な暴力の記憶、「裏切り」や「転向」の問題、そうした戦時下の倫理的課題に応答するという、切実な含意があった点を明らかにするとともに、同作が「キリスト教文学」と「転向文学」とを架橋するような作品であることを示唆する。更には『最後の殉教者』『その前日』『札の辻』などの『沈黙』に先行する作品群との関わりについても、詳細に論証している。なお、遠藤が、上智大学予科に在学していた点は、その歿後に明らかになった経緯もあり、改めて慶應義塾大学に入学後、カトリック教会系の寮生活を送った時期についても、なお不分明な点が多く残されているが、幾つかの作品に反映された戦時下の記憶などから、それらを類推し、髣髴とさせる筆致にも、多々肯綮に中る部分が多い。それは、第六章「〈裏切った弟子〉としての私――遠藤周作『死海のほとり』における巡礼」にも、大きな翳を落としている。そこでは、戦時下の遠藤の苦い体験から、「裏切った弟子」に自己を重ねて生きた戦後経験が問い直され、「教会のイエス」ではなく、「私のイエス」を探究する行為の必然性が解き明かされている。次いで、第七章「〈無力なイエス〉が成し得たもの――遠藤周作『イエスの生涯』と同伴者」では、恰も「踏絵」を踏むような自らの戦争体験を踏まえながら、イエスを自身を裏切った弟子たちとも共に歩む「同伴者」として描き出し、そこに「踏絵」と「転向」の微妙な相違点を指摘している。第八章「〈無力なイエス〉と戦後経験――遠藤周作のイエス像批判をめぐって」では、彼の描く「無力なイエス」像や「転向」する弱者をイエスが批判しない点などが、戦後キリスト教界の文脈の中で、賛否を招き、一定の批判にも晒されたことについて、聖書学の影響とともに、戦後の日本社会の中でキリスト教徒が模範とすべきイエス像についての論争があったこと、それを踏まえて、敢えて「無力なイエス」像を描くことは、信仰的にも、政治的・社会的にも、遠藤にとって、ある種の「異議申し立て」であったとの見解を提示している。最後に終章「遠藤周作の宗教的経験としての戦後経験」では、残された課題にも触れながら、遠藤周作の文学実践に関して、宗教的経験として戦後経験を語りながら、複合的な歴史意識をも喚起させる一面があることを指摘して、本論文の全体の幕を閉じる。

以上、本論文では、遠藤周作を俎上に載せて、戦中派キリスト教作家としての自己形成、戦後キリスト教作家としての文学上の実践や政治的・社会的な実践、また、それらを通じて、戦時下の倫理的課題に如何に対峙しつつ、戦後の同時代的な課題にも応答していたか、などについて、総じて、極めて説得的に論述している。遠藤の文学実践はもとより、その信仰の内面にも、深く分け入って、共感的に描く姿勢にも、大いに好感が持てる。キリスト教学の先行研究を踏まえた宗教的な諸問題に対する認識においても、深い理解が窺える。また、大阪万博キリスト教館をめぐる活動など、これまで周知されておらず、未発掘の側面に対する言及や論証など、資料的な価値にも、特筆すべき点がある。

無論、本論文にも、幾つかの疑問や瑕瑾も、全くない訳ではない。前述したように、筆者の論述は、極めて説得的で、また、遠藤の文学的な信念に寄り添い、同時に、信仰上の内面の襞をも、深く掘り下げてはいるが、全体を通じて、時に些か論理的な飛躍も見られるので、そうした文学実践なり、信仰に対して、必ずしも共感的ではない読者をも説得するためには、更なる文章上の彫琢も必要かと思われる。また、全体として、第Ⅱ部と第Ⅲ部とが、個別の論攷としては、それぞれ優れた点も多いものの、両者の有機的で内在的な繋がりが、今一つ弱いようにも感じられる。キリスト教を自らの身の丈に「合わない洋服」に準えて、それを着こなしていくという、遠藤の有名な終生のテーマは、思想や宗教など、文化接触や文化複合の際の普遍的な問題系を照射しているものと思われるが、一方で、本論文からは、様々な葛藤もあったにせよ、遠藤自身は、既に青年期には、それなりに信仰的な立場を確立していた如くにも窺える。彼自身が上智大学予科に在籍していたことを秘匿していた点も含めて、敢えて落第生や劣等生を演じていたのは、むしろ日本的な風土にキリスト教を根付かせるための卓抜なポーズではないかとの疑念さえも禁じ得ない。更には、「無力なイエス」像も然りであるが、「裏切り」や「転向」をも赦すイエスや神の造型に対して、キリスト教界、文学界の双方から、「浄土真宗的」「東洋思想的」といった批判がある点についての言及もあるが、日本国内のみならず、特に西欧のカトリック教会や文壇における同様の評価や批判に関しても、より本質的な論評や筆者なりの反論なども望まれるところである。「東洋思想」的な側面という点では、晩年の作である『深い河』をどう評価するかという問題にも繋がろう。その他、左派イデオロギーに対する懐疑ゆえの非政治的姿勢に窺えるある種の「政治性」について、当時の冷戦体制や反共主義との関わりにおいても検討すべきこと、遠藤自身が研究したフランスのカトリック文学(モーリャック、Ｊ.グリーンなど）からの影響についても、考察すべきとの意見もあった。もっとも、これらは、むしろ今後の課題というべきであり、本論文の価値を些かも減じるものではなく、こうした様々な思索に誘われる点もまた、本論文の功徳であろう。審査委員会では、本論文の着眼や考察に見られる多くの卓見、文学研究としての独自性や画期性、大きな資料的な価値などを踏まえて、全員一致で、本専攻の学位論文として相応しいものと認定した。